

令和8年2月24日

世田谷区立深沢小学校
学校運営委員会 委員長 鈴木 育也 様
学校長 須藤 央 様

学校関係者評価委員会
委員長 水越 正幸

令和7年度 学校関係者評価委員会 報告書

世田谷区立深沢小学校学校関係者評価委員会では、アンケート及び学校自己評価点検等の評価資料をもとに、本年度の教育活動全般について考察・検討を進め、その結果を以下のとおり報告いたします。

また、学校及び学校運営委員会においては、これらの結果を分析し、今後の対策の検討をお願いします。

なお、地域のみなさま、保護者、学校教職員、児童のみなさん、アンケート実施にご協力頂きありがとうございました。

1 評価資料概要

(1) 関係者等アンケート

対象：児童(5・6年)、保護者、地域

実施期日：令和7年10月15日～10月30日

配布数：208件(児童)、531件(保護者)、23件(地域)

回答数：185件 88.9%(児童)、515件 97.2%(保護者)、17件 73.9%(地域)

(2) 自己評価

対象教職員人数：36人

(3) 報告書の見方

集計は、小数第2位を四捨五入して算出した。したがって回答を合計しても100%にならず、1%の範囲で増減することがある。

また、回答の比率(%)は、その設問の回答者数を基数として算出した。

2 重点目標への取組み

(1) 探究的な学びを通して確かな学力を培う

今年度の深沢小学校の経営方針では「児童にとって、学んでよかったと思える学校」を挙げている。さらに児童育成の重点目標である「探求的な学びを通して、確かな学力」の定着に向けて、研究推進委員会を中心に教師全員で授業研究を深め、教師の授業力の向上に努めている。日々の学校生活では児童と教師がかかわる時間の多くが授業を通してである。児童の実態を把握し「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業展開をすることで児童と教

師の信頼関係が培われ、児童同士の関係も良好になる。そして、それは「学校生活が楽しい」「学ぶことが楽しい」と児童自身の実感につながる。

そうした考えを基に今年度の授業実践の成果と課題についてアンケート結果より考察する。

「わたしは授業では課題（めあて）について自分で考えたり、しっかりと振り返ったりしている」の質問に対して児童の肯定的な結果は74.1%である。それに対して教職員の授業実践による肯定的な結果は97.2%と児童の結果と違いがある。授業では課題解決学習、問題解決学習を基本に展開される。児童自身が課題を明確に理解して、自力学習やグループワークによって解決に向かう過程で確かな学力や非認知能力が培われる。今回の質問では教師は課題解決学習を展開しているが、児童にとって課題解決までには至らない状況と判断して返答してはいないだろうか。「めあてを考える、振り返る」と課題を解決することとは観点が違う。校内研究では算数の教科を取り上げているが、算数の教科特性として思考過程は様々であるが、結論（答え）は一つになることが多い。児童の中には正解の○か×での経験から肯定的な数値が低くなったとも考えられる。ただし、学習内容が難しくなる高学年の学習内容で肯定的な結果が74.1%は決して低いとはいえない。

次に「自分の考えたことを話し合ったり発表し合ったりしている」「わたしは相手に話が伝わるように話し方を工夫している」の結果について、教師は授業の展開で「話し合い」や「表現の工夫」について意図的、計画的に取り入れて指導していることが分かる。また、児童の結果も肯定的な数値が高い。特に「話し方の工夫」をしているという児童の数値が78.4%は高いと考える。これは学習面だけではなく、「3」自分と友達について「わたしは自分の気持ちや友達を理解しようと努力している」の肯定的な結果90.8%と関連している。学校生活を楽しく過ごすために大切なことは友達のかかわりである。

また、学習面では、児童一人一台のタブレットの学習が展開され学力の向上の大きな力となっている。今回のアンケート結果でも「わたしは学習の中でタブレットを使って調べたり、発表する際に使用している」との肯定的な結果は教師の結果と同様に高い数値がでていいる。しかし「わたしは自分で考えたことを話し合ったり、発表し合ったりしている」の肯定的な結果は61.1%で学習面での項目の中で最も低い。そうした中で今後、友達同士のかかわりや学び合いの実感が希薄になるのではないかと危惧している。最後に「学ぶことは楽しい」の児童アンケートの結果は74.6%と昨年度とほぼ同じである。この質問については昨年度も課題になっていたが、漠然と広い意味の解釈するため児童の回答に戸惑いがあるのではないかと考える。

冒頭に述べたように教師の授業力向上の基盤になるのは、校内研究会である。今年度の校内研究会の研究主題は昨年度に引き続き「自分の考えをもち、伝え、高めることができる児童を育てる授業作り」である。昨年度の成果と課題を受けて、低学年・中学年・高学年の三つの分科会に分かれて研究主題への具現化を図っている。サブテーマは発達課題に合わせて分科会ごとで設定して具体的な手立ての実践を日々の授業を通して実施している。そして、校内研究授業を通して成果と課題を全体で共有していく過程で教師全体の授業力を高めることができる。校内研究は「一人の百歩ではなく、百人の一步」である。今後も深沢小学校全教員の授業力の向上に向けて応援をしていきたい。

(2) 思いやりのある子を育てる

今年度、学校経営方針【児童育成】の重点目標の一つに「思いやりのある子を育てる」が

あり、そのために学校としてできることとして①「人権尊重」②「具体的に褒め愛情をもって叱る」③「道徳授業」④「縦割り班活動」⑤「家庭と連携した情報モラル教育」が挙げられている。

思いやりの心をもつためには「相手の気持ちを想像し感じとる共感力」を形成する必要がある。また「他の人は自分とは違う感情を持っているということを理解する」必要がある。思いやりの心をもつことで多くの問題発生を抑制することができ、問題自体をも解決することができる。

深沢小学校では、先生の指導、道徳教育、班活動、クラブ活動を通して、思いやりのある児童育成に取り組んでいる。その取り組みの成果をアンケート結果より考察していく。

児童アンケート「わたしは、自分の気持ちや友達の気持ちを理解しようと努力している」の肯定的回答が90.8%、「わたしは、友達を大切にしている」の肯定的回答も95.7%と、とてもいい結果になっている。ところが「わたしは、相手に話が伝わるように、話し方を工夫している」の肯定的回答が78.4%、「わたしは、自分の考えたことを話し合ったり発表しあったりしている」の肯定的回答が61.1%という結果になっている。

友達を大切に思い、話を聞くことはできてはいるが、あまり話し方の工夫ができていない。また、あまり話し合うことができていないのではないかと、いう結果がみえてくる。さらに教職員アンケート「授業では、相手に話が伝わるような話し方の工夫について指導している」の肯定的回答は91.6%あるが、否定的回答（あまり思わない）が8.3%であることに驚きを隠せない。このことから「相手の気持ちを想像し感じとる共感力」は持ち合わせているが「他の人は自分とは違う感情を持っているということを理解する」機会が足りていない結果がみえてくる。

最後に児童アンケート「わたしは、なかよし班活動で他学年の友達と楽しく活動できている」の否定的回答が16.8%と、思っていた以上に低い数値が出ている。この結果は、教職員アンケート「なかよし班やクラブ・委員会などの特別活動を通して、異学年交流を適切に行っている」の否定的回答が2.8%と、非常に低い数値になっていることにも表れているといえる。

昨年度も言及したが、画像や動画の配信サイトなどをはじめとした受け入れるだけのコンテンツに慣れすぎて、自分から積極的に交流していく、自分から表現することが苦手となっているこの現状は今後の課題といえよう。

また「若者のSNSによるいじめ」がいまだに大きな問題として、頻繁に報道されている。いじめの被害者だけでなく、加害者もインターネットで個人が特定され苦しむ時代になっている。

特にスマートフォンやタブレットの使用については、繰り返し教育し、子どもときちんと向き合う必要がある。LINEを代表とするチャットツールの使用についても、思いやりの欠けた誹謗中傷コメントの問題、また悪意なく発した言葉も、いつの間にかエスカレートして大きな問題へと発展していく危険性があること。これらのことはこの現代では、小学生のうちに知っておくべき重要なことである。

このことについては家庭での指導も非常に重要であり、うまく学校と連携した指導を望みたい。また、学校であるからこそできる指導は、引き続き繰り返しお願いしたい。

そして、その問題解決の根源は「思いやり」であると思われる。相手を思いやることが多くのことを解決すると考えたい。相手がいるからこそ「何をしたら傷つくのか」を考え、自分の言葉や行動に責任を持つことを学校生活で学んでほしい。

先生方が何度話しても、子どもたちが理解しようとしなない。同じ失敗を起こしてしまう。といったことはあるかもしれないが、何度も繰り返し学べる小学校時代の6年間は、人間の成長において本当に大切な期間であり、そこで繰り返し学んだものが、日本人が自然と実践している行動原理になっている。

自分の気持ちをうまく表現し、友だちや周りとの違いを受け入れ、想像し、理解する。そのような「思いやり」のある子どもたちで日本中を満たしてほしいと切に願う。

(3) 体力の向上と健康の保持増進を図る

学校経営の基本方針に「体力の向上と健康の保持増進を図る」があり、心と体を一体としてとらえ、あらゆる側面から児童の健康保持増進を図っていくことが挙げられている。

考察をするに当たり、アンケート項目を「食」「体力」「生活」の3つの視点から分析をしていく。

はじめに「食」に関するアンケート結果を見ていくこととする。「わたしは、朝ごはんをしっかりと食べている」の項目は、例年児童・保護者ともに高水準を保っており、今後も朝食をしっかりと取り元気に登校できる生活を継続して欲しい。児童アンケート「わたしは、苦手なものでも少しでも食べようと努力している」に対する回答は、肯定的回答が82.2%であり「好き嫌いなくしっかりと食べる」児童の姿が伺え、教職員アンケート「給食や保健の授業その他折に触れて、栄養バランスの良い食事の大切さを伝えている」も肯定的回答が91.6%であることから、学校と家庭での食育指導の成果と言えるのではないか。

次に「体力」に関するアンケート結果を見ていく。「わたしは、中休みや昼休みに体を動かしている」は肯定的回答が60.0%であった。教職員アンケート「中休みや昼休みでは、児童が外に出て体を動かすことを励行している」の肯定的回答が91.6%であることから、教職員は外遊びの声掛けはしているが、子供たちは思い思いに休み時間を過ごしているようだ。

児童アンケートが高学年であることを考えると、特に低い数値とは言えない。保護者アンケート「家庭では、子供が体を動かす機会を作っている」の肯定的回答は77.4%であった。これには、運動系の習い事も含まれている可能性を考えると、自然環境での「外遊び」をどれくらいの子供が日常でしているのかが気になる。地域アンケート「本校の子供たちは、地域の公園などで体を動かしている」では、肯定的回答が41.2%「あまり思わない」が同値41.2%であった。私自身、仕事柄地域の児童館や公園などに行く機会が多いが、体を動かして外遊びをしている小学生の割合は低い印象だ。体育や習い事だけが基礎体力を作るのではない。普段から外遊びを通して、走ったり、跳んだり、登ったりすることで、筋力や柔軟性も向上する。全米科学・工学・医学アカデミーの研究によると、外遊びを増やすことで子供の近視を減らせるとの報告もある。学校と家庭で連携を取りながら、子供たちが外で体を動かす大切さも伝えていくことが必要ではないか。

最後に「生活」に関係する項目を見ていく。「わたしは、早寝早起きをしている」の肯定的回答が57.9%であった。学年別に見ていくと、5年生の肯定的回答が67.3%、6年生が46.4%であった。対して保護者の「家庭では、子供が早寝早起きできるよう、環境を工夫している」の肯定的回答が82.1%であることから、「親としてできることは頑張っているが成果が出にくい」状況が想像できる。特に高学年になると放課後の塾通いなどが増加するため、早く寝たくても寝られないという現状も透けて見える。「生活」に影響があるであろう項目の「家庭では、ゲームやスマホ・タブレットの使用ルールを決めている」は、肯定的回

答が79.3%であった。割合としては決して悪くはないが、ルールが守られているか、という観点も今後必要になってくるのではないか。

健やかな身体作りは家庭基盤の充実が必要不可欠である。学校と家庭が連携を深めながら、子供たちの「体力の向上と健康の保持増進」のための教育活動を進めていくことを期待する。

3 最後に

今年度をもって、平成21年度から始まった学校評価はひとつの区切りがつくこととなる。来年度からは、新たな学校運営協議会のもとで、教職員の自己評価に対する評価を行うことになり、これまでは、教育委員会の設定した設問に学校独自の項目を設定し、学校評価の参考としてきたが、今後は、学校の自己評価に対する検証となる。

自己評価は、一般的に項目設定者にいい評価が出るような設問になりやすいことから、十分注意し、学校の成果の確認になるようなものとなることを望むものである。

小学校生活の6年間は、子どもがその人生を歩んでいく中で、勉強だけでなく様々な人や経験を積むことで社会性などの土台となる部分を形成する期間である。

そのため小学校は、単に勉強だけを教えるだけでなく、どうしても生活面にも配慮していかざるを得ない。

それは教員だけでできることではなく、保護者や地域の方も学校経営に参加をし、人間初心者である子どもたちが、今後、人生を歩んでいく上の力がつく様、学年に応じた子どもへの関わりを持っていくことが重要である。

来年度から始まる新たな制度により学校が、子どもたちへの生きる力を身につけるための一助となるよう望むものである。